

## 主 題：キリストの弟子として歩むとは②

聖書箇所：ヨハネの黙示録 2章1-7節

このように2週に亘って皆さんとみことばを学べる機会が与えられていることに感謝しています。今日の内容に入る前に、前回学んだことを思い出してみましょう。「キリストの弟子として歩むとはどういうことか？」という一つの質問について考えました。一つ目に、それは「何よりもキリストを愛することだ」と見ました。この世の何ものよりも、私たちが最も大切にすもの、自分のいのちさえも惜しまず神だけを愛すること、そのために犠牲を払わなければならないということを見ました。また、二つ目に「自分の十字架を背負う」ということがありました。これまでの神に逆らう古い生き方に死に、キリストを知る以前の自分勝手な生き方をする自分自身に死に、新しい歩みが始まりました。主のために継続して日々自分を犠牲にして主に従っていくことが求められました。そして、三つ目に「犠牲を伴うことを考えなければならない」ということを見ました。主の本当の弟子として歩むことには自分の存在はありません。自分の時間も将来の計画も自分自身のからだや財産、また、自分の人生そのものも、何もかも自分のものではないのです。すべてキリストのものであります。あらゆるものを犠牲にしなければならない、そうでなければ「わたしの弟子になることはできない」とイエスは言われました。だから、私たちは「費用」というもの、どれだけの犠牲が必要なのかを考えなければいけないと教えられました。

確かに、とても厳しく、また、高い規準です。神を愛し、自分を犠牲にし、どんな時も主に従っていくこと、それは困難を伴うことです。しかし、これがキリストの本当の弟子として歩むためにキリストが設けた規準でした。クリスチャンとして、主の弟子として歩み始めるその正しいスタート地点は、どのような犠牲もいとわない姿勢であることを見ました。正しいスタート地点からスタートしなければ決して正しいゴールにたどり着くことはありません。私たちひとり一人の責任は、私たちがどこから出発するのかを考えなければいけないということです。

もし、キリストの弟子として歩むこと、自分のすべてを捨ててキリストに従っていくという信仰のレースが大した意味をもたないのであれば、そこまでこれらのことを真剣に考える必要はないのかもしれませんが、また、もし、私たちには多くの選択肢があって、その中の一つを選ぶことができるというのなら、自分の自由に自分の好きなように歩いていけたかもしれません。しかし、キリストの本当の弟子として歩むということは、私たちひとり一人の永遠に関わる大切な問題です。私たちの人生のレースは二つに一つしかありません。キリストの弟子として歩むのか？それとも、キリストの敵として歩むのか？です。どちらかしかありません。そして、どちらかの道を選ぶのか？それはひとり一人、個人の選択であると、そのことを私たちは見たのです。

ですから、今一度、私たちは自分自身に問い掛けなければいけません。自分はキリストの本当の弟子として新しい正しいスタートから歩んでいるのか？ということです。この後、見ていこうとしているのはその続きですが、前回はスタートを見ました。今度は本当の弟子として具体的にどのような歩みをしていくのかを考えたいのです。当然のことですが、どのレースでもスタートとゴールだけしかないものはありません。必ず、その過程というものがあります。100mであれ42.125kmであれ、その行程があります。キリストの弟子として歩むとき、同じように、私たちにはスタートがあり過程があり、そして、ゴールがあるのです。そして、もし、途中の過程で私たちが道を間違えてしまったとき、道を踏み外してしまったときは、正しいゴールにたどり着くことができません。

あるとき、クロスカントリーのテレビ番組を見ていたのですが、その終盤に多くの方がゴールに向かって走り込んで来ました。いろいろな表情が見られました。苦痛を浮かべている人、やり切った表情の人、笑顔の人、感動している人、様々な表情が見られます。その中に、一人の男性がとても悲しい表情をしていました。なぜか？彼は途中までダントツでトップを走っていたのですが、途中で道を間違えてしまったので遅れてしまってそのレースに勝つことが出来なかったからです。途中で道を間違えることは悲劇です。もし、それに気づいて正しい道に戻るならそれは良いことでしょう。でも、間違ったことに気付かずそのまま歩み続けてしまったなら、折角正しいスタートをしたとしても、正しいゴールにたどり着くことはないのです。正しい道のりを正しく歩む、それが私たちに求められていることです。

私たちは正しい道のりを、自分を犠牲にして主にお会いするその日を楽しみにしながら、栄冠を目指して走り続けていかなければいけません。そして、もし、その途中で自分が間違った道を歩んでいることに気付いたなら、正しい道に戻らなければなりません。

今日のテキストである黙示録2章の1-7節は、多くの皆さんがよくご存じの箇所です。大切な「愛」

についてその真理が記されています。同時に、私たちひとり一人には一つの大きな質問を投げかけられています。それは「あなたは正しい道のりを今歩んでいますか？」ということです。これからそのことを見ていきますが、どうぞ、この問いを自分自身に問い掛けてください。

### ☆あなたは正しい道を歩んでいるか？

黙示録 2 : 1-7 を読みます。

- 2:1 エペソにある教会の御使いに書き送れ。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方がわれる。  
2:2 「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。  
2:3 あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。  
2:4 しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。  
2:5 それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。  
2:6 しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。  
2:7 耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の實を食べさせよう。』

初めに、二つのことを見ます。だれに対してこれが書かれたのかという「宛先」と、だれがこれを送ったのかという「差出人」です。

**A. 宛先** : 1 節の初めに「エペソにある教会の御使いに書き送れ。」とありますから、エペソの教会に宛てて書かれたことは明白です。もう少し、この箇所を理解するために、エペソの町がどういうところであったのかを確認しましょう。エペソは「アジアの光」、小アジア（現在のトルコ）にあって最も大きく重要な都市とされていました。この当時の人々にとって「小アジア＝エペソ」というほどの重要な都市だったのです。その理由はいろいろありますが、大きく二つのことが挙げられます。

(1) エペソの地理的な位置 = 川や海に面していてアジア最大の港がありました。それゆえに、大きな商業地として、多くの商品はそこを経由して様々なところに運ばれていきました。ですから、いろんなものが流通し賑わっていました。

(2) 宗教の中心地 = エペソにはアルテミス神殿という古代七不思議の一つとされる神殿がありました。その当時の人々にとって、この大女神アルテミスへの信仰は大きな影響力をもっていました。使徒の働き 19 : 26-28 をご覧ください。「:26 ところが、皆さんが見てもいるし聞いてもいるように、あのパウロが、手で作った物など神ではないと言って、エペソばかりか、ほとんどアジア全体にわたって、大ぜいの人々を説き伏せ、迷わせているのです。:27 これでは、私たちのこの仕事も信用を失う危険があるばかりか、大女神アルテミスの神殿も顧みられなくなり、全アジア、全世界の拝むこの大女神のご威光も地に落ちてしまいそうです。:28 そう聞いて、彼らは大いに怒り、「偉大なのはエペソ人のアルテミスだ」と叫び始めた。」と書かれています。ですから、この当時の人々にとって大女神アルテミスへの信仰は大きなものだったのです。彼らはアルテミスに自分をささげていました。偶像礼拝の罪がこの町には溢れていたのです。

また、この信仰がもっていた影響はそれだけではありません。この神殿の境内は神聖な場所とされて法が適用されませんでした。その結果、どんなに酷い犯罪者でもその場所に駆け込めば罪は問われず安全だったのです。そこに行かなくても想像できませんか？その神殿の中は罪を犯した多くの人たちが逃げ込んでたむろしているのです。犯罪、罪、悪、それらが満ちていたところ、その姿を私たちは容易に想像できます。エペソの町には異教がはびこっていただけではありません。悪が溢れ悪の温床のような町であったと見るができるのです。エペソの町は経済的、宗教的、文化的にも様々な面において繁栄して重要な都市でした。しかし、同時に、悪に溢れた都市でもあったのです。

また、エペソは聖書の歴史から見ても重要なところであったと見ることでできます。皆さんはそのことはよくご存じですから多くは触れませんが、パウロは他のどの町よりもエペソに長く滞在しました。3年に亘って人々を教えました。人々は当時の最高の教師から学んだのです。使徒 20 : 36-38 にはこのように書かれています。そこにはパウロがエペソの長老たちとの別れの様子が印象的に記されています。「:36 こう言い終わって、パウロはひざまずき、みなの方とともに祈った。:37 みなは声をあげて泣き、パウロの首を抱いて幾度も口づけし、:38 彼が、「もう二度と私の顔を見ることがないでしょう」と言ったことばによって、特に心を痛めた。それから、彼らはパウロを船まで見送った。」と。

パウロはエペソの教会をとっても愛しています。同時に、エペソ教会の長老たちもパウロのことを愛していたのです。教会の人たちがいかにパウロと親密な関係にあったのかを私たちは見るができます。パウロが去った後、テモテによって人々は教えを受けます。テモテはこの教会の最初の長老になりました。その後はどうなったか？ヨハネによって教えられました。他にもアクラとプリスキラ、アポロとい

うすばらしい聖書の知識に富んだ人たちがいたのです。ですから、私たちがもし一つ、教会の歴史の中で最も教理的に正しく聖書の教えに沿っている教会を挙げるとするならば、このエペソ教会を挙げることができるでしょう。それほど、エペソ教会はすばらしい教師たちに教えられて正しい福音という土台に立っていたのです。これが手紙の宛先であるエペソの姿です。

**B. 差出人** : 次に、1節には差出人についても教えています。『右手に七つの星を持つ方、七つの金の燭台の間を歩く方が言われる。』と。ここにはヨハネは具体的な名は書いていませんが、1章からの流れを見ていくと、これがイエス・キリストであることは明白です。栄光ある、常にいましめを後に来られる主キリストがエペソの人々に対してヨハネを用いてこの手紙を書いたのです。この部分で皆さんに見ていただきたいことばがあります。『右手に七つの星を持つ方、』の「持つ」と「七つの金の燭台の間を歩く方」の「歩く」という二つのことばです。

「持つ」 = これは単に「持つ」というイメージではなく「持っているものをしっかり掴んで放さない」という強い意味を表わすことばが使われています。では、キリストはいったい何を掴んでいたのか？「七つの星を…」と書かれています。黙示録1:20の後の部分を見ると「…七つの星は七つの教会の御使いたち、」とあります。ですから、「七つの星」とは「七つの教会の御使いたち」のことです。「教会の御使いたち」とありますが、これは何か天使のようなイメージではありません。これは「教会のリーダーたち、長老たち」を表しています。つまり、イエス・キリストは教会のリーダーたちをその御手のうちにもっておられるということです。言い変えるならば、教会は完全にキリストの支配下にあるということです。教会の主権、教会の権威は私たちのリーダーにあるのではなく、すべて主イエス・キリストのものであって、かしらであるキリストが教会の主権をもっているということを私たちはここに見ることができるのです。

「歩く」 = 二つ目のことばは「歩く」です。このことばの元のギリシャ語は「歩き回る」という意味をもつことばです。キリストは「七つの金の燭台の間」、つまり、1:20を見るならば「七つの燭台は七つの教会である。」とありますから、イエス・キリストは七つの教会の間を歩き回っていたということです。まるで、監察官のように教会の中を歩き回り、ひとり一人のクリスチャンを観察し、それに基づいて評価していると、そのような意味をもった「歩く」ということばがここで使われているのです。

そして、この二つのことばは現在形が使われています。ということは、この働きはこの当時のことだけでなく、今現在もイエス・キリストは教会の中を歩き回っているということです。キリストは教会の中を歩き回り私たちひとり一人のことを見ておられ、そして、主権者である主があなたのことを評価されると、そのことをここで見ることができます。差出人がイエス・キリストであることを見ましたが、エペソ教会の人たちに関する三つのポイントを見ましょう。

## ◎エペソ教会に関する三つの説明

### 1. 神の前に称賛される点 2-3、6節

2節には「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。」とあり、「知っている」ということばが使われています。これは、黙示録を見ていくと他の教会に対しても使われていることばです。主イエス・キリストは「知っている」ということです。このことばは「キリストの完全な知識」のことです。ですから、キリストの知識は私たちのそれとは違って完全なのです。私たちは知らないことがたくさんあるゆえに、どんどん知識を足していきます。しかし、キリストはもうすでに完全な知識をもっておられるのです。キリストは教会の中を歩き回り教会のことをすべてご存じなのです。そして、その完全な知識に基づいてそれぞれを評価するのです。当然、だれ一人、その評価に対してNOということはいけません。

この完全な知識をもっておられるキリストが言われます。「わたしは、あなたの行いとあなたの労苦と忍耐を知っている。」と。エペソの人たちはキリストにすべてをささげてキリストの栄光のために働く人たちでした。「労苦」と「忍耐」ということばが出ています。

「労苦」 : 精神的、肉体的、また、感情的にもすべてを使い果たして疲れ果てるほど働くという意味です。間違いなく、エペソの人たちはそのようであったと私たちはここに見ることが出来ます。

「忍耐」 : また、「忍耐」ということばも記されています。厳しさ、苦しさ、試練の中にあつて、その状態を受け入れてそれに左右されることなく勇気をもって困難に立ち向かうという、そのような意味をもったことばです。

彼らが置かれていた状況は、すでに少し見ましたが、相当ひどいものでした。エペソの町は悪が溢れていました。異教が満ちいろいろな間違った教えが飛び交い、そして、クリスチャンとして彼らがみことばを語る時は多くの迫害があつたのです。キリストのためにすべてをささげて出て行ったエペソの人たちが迫害や困難、また、中傷や嘲りに遭っていた様子は想像できるでしょう。しかし、彼らはそのような困難があつたにも関わらず、パウロやテモテから受けたすばらしいキリストの真理、福音を町の

人々に語り続けていました。彼らはときが良くても悪くてもみことばを語り続けていたのです。

また、エペソの人たちはそれだけでなく、主の真理に反するようなことに対しては決してそれを良しとすることはなかったと、そのことが記されています。2節の後半に「また、あなたが、悪い者たちをがまんすることができず、使徒と自称しているが実はそうでない者たちをためして、その偽りを見抜いたことも知っている。」と書かれています。彼らは教会の中に入り込んで来た偽教師たちを見抜く識別力に長けていたのです。イエスはマタイ7：15でこのように言われています。「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは貪欲な狼です。」と。また、パウロも自分がエペソの町を発つときに、長老たちに向けてこのように警告しています。使徒20：29「私が出発したあと、狂暴な狼があなたがたの中に入り込んで来て、群れを荒らし回ることを、私は知っています。」と。ですから、神の真理を曲げようとする人たちはどの時代にあっても存在するのです。そして、エペソの教会にあっても、そのような偽りをもって正しいことを曲げようとする人たちが現れたということができます。

また、6節には「しかし、あなたにはこのことがある。あなたはニコライ派の人々の行いを憎んでいる。わたしもそれを憎んでいる。」とあります。「ニコライ派の人々」とはキリストにある自由の名のもと、性的不道徳、また、偶像にささげた食べ物を食するということがありました。ですから、いつの時代でも間違った教えは存在しているのです。1テサロニケ5：21-22に「:21 しかし、すべてのことを見分けて、ほんとうに良いものを堅く守りなさい。:22 悪はどんな悪でも避けなさい。」と書かれています。

ですから、聖書を通して見るときに、正しいものと間違っただけのものを見極める識別力が必要だということが教えられているのです。エペソ教会の人たちは何が真理なのかを知っていたゆえに、「これは間違っている」「これは正しい」と言うことができたのです。何十年にも亘ってエペソの人たちは主のために働きました。みことばを語り困難に耐え、試練に立ち向かい、悪や異端に対してはみことばをもって戦いを挑み、からだも精神も、また、感情もへとへとになるまで主にすべてをささげていたのです。そのような人たちだったのです。

3節には「あなたはよく忍耐して、わたしの名のために耐え忍び、疲れたことがなかった。」と書かれています。彼らはどんな状況に置かれたとしても揺るぐことがありませんでした。真理に立って主に忠実に仕えていたクリスチャンだったのです。本当の弟子に見られる通り、自分のすべてを犠牲にして歩んでいた人たちでした。一見すれば、神の前に称賛されるすばらしい人たちだったのです。

## 2. 神の前に非難される点 4節

しかし、残念なことに、称賛だけで終わっていません。4節からエペソの人たちへ厳しいメッセージが記されています。「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは初めの愛から離れてしまった。」と。彼らは「初めの愛から離れてしまった。」と言います。ここで注意することは、イエスはここで彼らが全く愛をもっていなかったとは言っていないということです。初めの愛を失ってしまったと言うのです。かつてもっていた愛が変わってしまったということです。確かに、エペソの教会はすばらしい働きをしていました。表面上は何の問題もないと思われれます。しかし、その内側は深刻な問題を抱えていたのです。「初めの愛」とは何でしょう？それは、私たちが初めてイエス・キリストを個人的に知ったときに生じる聖い純粋な愛です。キリストが自分のために死んでくださったのだ、イエス・キリストが自分のために救いを与えてくださったのだと、その神の愛の大きさに気づくとき、私たちは心から神への純粋な燃えるような愛が生じるのです。神を愛するゆえにどのような犠牲も厭わないのです。また、神に仕え、神を愛するだけでなく、私たちは兄弟姉妹、隣人を愛します。これが「初めの愛」です。エペソの人たちはこの「愛」を失ってしまっていたのです。

では、「初めの愛」を失うことがなぜ問題だと思えますか？エペソの人たちは完全な愛をもっていなかったのではなく、「初めの愛」を失っていました。どうしてそのことが問題なのでしょう？みことばによって四つの点から知ることが出来ます。

### ◎「初めの愛」が大切な理由、なぜ、「初めの愛」を失うことが大きな問題なのか？

#### 1) 本当の弟子は何よりも主を愛し、自分をささげることがいつも求められているから

先週も見ましたが、ルカ14：26、には、主の弟子として歩み続けて行くためには、他の何よりも主だけを愛し、自分のすべてをささげる決心が必要だと教えられています。もし、キリスト以外のものに目を向けるなら、それは本当の弟子にふさわしくないということです。マタイ10：37、38に「:37 わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。:38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」とある通りです。主の本当の弟子として歩むこと、それには自分を犠牲にして主だけを愛することが必要だということを見ることが出来ます。

#### 2) 第一の戒め、また、第二の戒めが「愛」を求めているから

マタイ22：37-39「:37 そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くし

て、あなたの神である主を愛せよ。』：38 これがたいせつな第一の戒めです。：39 『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ』という第二の戒めも、それと同じようにたいせつです。」と、イエスはこのように教えています。もし、クリスチャンとしての行いのすべてを一言でまとめるなら、それは「神への愛」と言うことが出来ます。私たちは神を愛し、その栄光を現すために造られたのです。だから、「神を愛すること」はクリスチャンの第一の優先事項でなければなりません。もし、この愛がないなら、最も大切なこの命令に背くことになるのです。

### 3) 神が愛であるから

Iヨハネ4：7-8には「：7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。：8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」と書かれています。ここで教えられていることはとてもシンプルです。私たちが神のうちにあるのかどうか？それは私たちのうちに神の愛が宿っているか、神の愛が真に根付いているか、神の愛が本当に生きてるかどうか、それがカギだということです。ですから、兄弟姉妹を愛さないということ、人を愛さない人は本当に神を知らないのだと、そのように言えます。そして、それは罪だと言うことができます。

### 4) 愛がなければどのような行動も価値のないものになるから

パウロはIコリント13：1からこのようにまとめています。「：1 たとい、私が人の異言や、御使いの異言で話しても、愛がないなら、やかましいどらや、うるさいシンバルと同じです。：2 また、たとい私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。：3 また、たとい私が持っている物の全部を貧しい人たちに分け与え、また私のからだを焼かれるために渡しても、愛がなければ、何の役にも立ちません。…：13 こういうわけで、いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。」、ですから、どんなに正しい行いをしてもしそこに愛がないなら、それは何の値打ちもないということです。どれだけ熱心に神に仕え、どれだけ熱心に人に仕えたとしても、そこに愛がないなら何の意味もないということです。聖書が教えることは非常にシンプルです。神の前に大切なことは「何をするか？」ではなく「あなたの心に何があるか？」です。外見がどうであっても内側がどうなのか？と問われるのです。

エペソの人たちはまさにこの問題を抱えていたのです。彼らのうちには愛がなかった、初めの愛から離れてしまったと言うのです。この問題は私たちひとり一人にも当てはまる問題です。ある人は教会に忠実に通っているかもしれませんが。ある人は教会の中で熱心に奉仕をしているかもしれませんが。ある人は兄弟姉妹のために喜んで何かを為し、未信者に福音を伝えているかもしれませんが。もちろん、これらの一つ一つはすばらしいことです。でも、もし、それを義務感でしているなら、それがあなたのルーティーンになったいるなら、もし、そこに愛がないなら、それは神の前に喜ばれることではないのです。あなたはすばらしいことをしている、しかし、初めの愛から離れてしまったと言われるのです。私たちも自分に問い掛けてみなければいけません。あなたが今していること、それはあなたがキリストを愛するその愛から来ているのでしょうか？もし、そうでないなら考えなければなりません。

### 3. 神からの警告 5、7節

エペソの教会に対して神は警告を与えています。5節「それで、あなたは、どこから落ちたかを思い出し、悔い改めて、初めの行いをしなさい。もしそうでなく、悔い改めることをしないならば、わたしは、あなたのところに行って、あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」、初めの愛から離れてしまっていたエペソの人たちに対して主は三つの段階で命令を与えています。

1) どこから落ちたかを思い出しなさい : 「思い出し、」は命令です。初めてキリストを知ったとき、喜びをもって愛をもって歩んでいた、その姿を思い起こしなさい、神とともに歩んでいた初めの愛を思い出しなさいと言います。

2) 悔い改めなさい : 自分が初めの愛を失っていると気付いたなら、それを放置しておくことはできない。間違いに気づいたなら、神の前に罪を告白し悔い改めなければいけないと言います。悔い改めるといのは180度向きを変えることです。罪に気付いたならその罪から離れ正しい道に歩いていく、それが必要であるということです。

3) 初めの行いをしなさい : 聖書が教える悔い改めは単に正しい思いをするだけではありません。行動が伴います。当初持っていた愛に戻り、思い起こし悔い改めるとともに、実際に、その愛に基づいて実践するようと、そのことが言われているのです。そして、もし、そのことをしないなら、悲惨な結果があると、ヨハネは「あなたの燭台をその置かれた所から取りはずしてしまおう。」と記しています。これは「教会は完全に破壊される、完全に取り除かれる」ということです。教会の存在自体が消滅してしまうのです。そこには多くの人がいるかもしれませんが、その中にキリストがいないのです。これは恐ろしいことです。しかし、現実のことです。

エペソの教会は素晴らしい教師たちに教えられ、熱心に学び、熱心に働きを為し、神の前にすべてをささげて、神に称賛されることがたくさんありました。でも、この教会は今もう存在しません。初めの愛を忘れてしまった結果、彼らは自分たちの教会を失ってしまったのです。同じことが私たちに起こらないとは決して言えません。私たちひとり一人の責任は自分の信仰を確かめることです。自分に問い掛けてみてください。「自分は初めの愛をもっているか？すべてのことを神への愛のゆえに為しているか？」と。

最後に7節ではこのように言われています。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい。」と。教会の中のすべてをご存じであるキリストはエペソの人たちだけに語りかけておられるのではありません。私たちひとり一人にも語り掛けられておられるのです。みことばを聞きなさい、あなたは初めの愛をもっているか？とチャレンジを受けているのです。みことばに聞き従う責任は私たちひとり一人にあるのです。もし、本当に救われて弟子として歩んでいるなら、「勝利を得る者に、わたしは神のパラダイスにあるいのちの木の実を食べさせよう。」と言われます。これは主のために歩んでいる者に主は「永遠のいのち」という祝福を用意してくださっているということです。神は、神を心から愛しすべてを捨てて愛をもって歩む弟子に対して、素晴らしい報いを用意してくださっていると、そのことが最後に記されているのを私たちは見ることができるのです。

さて、愛する兄弟姉妹の皆さん、私たちはキリストの本当の弟子として歩む、そのことを2週に亘って見て来ました。改めて言いますが、キリストの弟子として歩むためには、自分のすべてをささげることが必要でした。どんな状態にあっても、どんなに苦しくても、主に信頼して歩んで行くことが求められています。そして、そこには苦しみとともに神の愛があることは明白です。

イエスは「山上の説教」でこのように言われました。マタイ5：10「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。」と。ヨハネ15：20には「しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。」とイエスのことばが記されています。また、パウロもⅡテモテ3：12でこのように言っています。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、迫害を受けます。」と。

キリストの本当の弟子として歩むなら、そこには苦しみや迫害があります。自分が大切にしているもの、これだけは…と優先しているものも犠牲にしなければならないでしょう。人間的に考えるなら、すべてを主にささげてキリストのために歩んでいくことは困難なことかもしれません。しかし、皆さん、今日見たみことばから学んだように、私たちが覚えるべきことは、神の愛、キリストへの愛がどのようなものか？ということです。キリストに対する愛、それが私たちの信仰生活におけるカギです。Ⅰヨハネ4：7-9を思い返してみましょう。「7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。9 神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。」、キリストは大きな犠牲を払って私たちを罪の中から救い出してくださいました。私たちが何かをしたからではありません。私たちがそれに値することをしたわけでもありません。神の愛がそれをしてくださったのだと言います。

そして、私たちが知っていること、それはクリスチャンとして歩んでいく中でたとえ苦しみがあったとしても、それは神のご計画のうちにあり、そして、神はそれらを益にしてくださるということです。ローマ8：28「神を愛する人々、すなわち、神のご計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。」。

どうぞ、ひとり一人、最初の愛を覚えて歩みましょう。もし、この中にイエス・キリストを知らない人がおられるなら、イエス・キリストの弟子として歩んでいない人がおられるなら、今日、このときに、主イエスを信じてキリストの弟子として歩んでください。この人生の中にあって二つのことしかないので。キリストの弟子として歩むか、それとも敵として歩むのか、その選択は私たちひとり一人にあるのです。正しい弟子として歩むために、私たちは正しいスタートから始めなければいけません。そして、その過程に苦しみがあったとしても、神の愛を忘れず感謝をもって忠実に歩み続けることです。そして、最後に、主にお会いするそのときまで、そのレースを走り続けること、正しい道を走り続けなければいけないということです。最後にパウロのことばを見ましょう。ピリピ3：13-14を見ましょう。「13 兄弟たちよ。私は、自分はすでに捕らえたなどと考えるはしません。ただ、この一事に励んでいます。すなわち、うしろのものを忘れ、ひたむきに前のものに向かって進み、14 キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。」、キリストの弟子として歩むこと、それはこの通りです。犠牲を考え主を愛し、主のためにすべてをささげて、最後のキリストの栄冠を目指して忠実に歩み続けて行くこと、それがキリストの弟子として歩むということです。